



「新涼灯火」 近藤若菜（本学健康科学部学生／写真部）

平安の昔から、  
「昔の人」の懐かしい思い出を  
呼びおこすとされた橋の花の香り。  
その橋を最も好んだ「時の鳥（ホトトギス）」。  
「CHRONOS 時の鳥」は、  
ギリシア神話の「時の神」クロノスを頭上に戴き、  
「時」の天空をはばたく鳥を  
イメージしています。

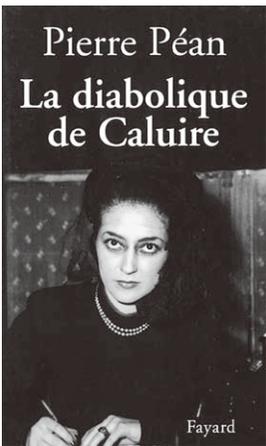
## クロノス [時の鳥] vol.42 2019.10

C 〈巻頭エッセイ〉  
O リディ・バスチアン ―レジスタンスの母・ハリー  
N 近代日本音楽史を彩る女性たち 3  
T 物語の女性 3  
E イギリス女性生活誌 42  
N 日本の伝統技術を守る 女性の進出 1  
T 女性歴史文化研究所 第28回シンポジウム報告  
S 『クロノス』25年  
INFORMATION

# リディ・バスチアン — レジスタンスのママ・ハリ —

渡邊 和行 本学文学部歴史学科教授

一九四三年六月、フランス・レジスタンスの軍事部門と政治部門のトップ、ドレストラン將軍とジャン・ムーランがゲシュタポの手に落ち、レジスタンスにとつて最大の危機が訪れた。背後にはスパイの暗躍があった。リディ・バスチアンもその一人だ。第一次大戦期ドイツの女スパイ、ママ・ハリに倣ってリディを「レジスタンスのママ・ハリ？」と書きたてる新聞も戦後に現れたが、彼女が歴史に名を残したのはルネ・アルデイの愛人としてムーランの逮捕に貢献したことによる。本稿は、ナチ占領下フランス最大の謎、ムーランの逮捕に間接的に関わったリディの本邦初の紹介である。



リディ・バスチアン

国鉄職員のアルデイは、一九四二年一月にレジスタンス組織コンバに加わり、秘密軍の鉄道破壊工作隊の指導者として活動していた。三十一歳のアルデイが、リヨンのレストランで二〇歳のリディと出会ったのは四三年一月のことだ。二人は数メートル離れて座っていたが、アルデイはリディに一目惚れし、彼女を愛人とした。実はリディは、四一年

にドイツ軍のスパイとなり、その後リヨンのゲシュタポに配属されていた。それゆえ、レストランでの遭遇も偶然ではないと主張する者もいる。さらに、彼女にはシュテングリットという愛人もいた。彼は、リヨン地区ゲシュタポ指揮官バルビー中尉の副官であり、フランス人スパイの統括者にして情報収集の責任者であった。

アルデイの赴く所、常にリディの姿があった。秘密の集会や会合にも彼女を連れて来ていた。こうしてリディは、秘密軍やレジスタンスの中枢に入り込むことができたとあった。特にリディはアルデイの秘密連絡員の探索に努めた。ゲシュタポが秘密軍司令官ドレストラン將軍をパリで逮捕できたのも、將軍とアルデイとの会合に関する秘密通信を入手しえたからだ。

アルデイが歴史に名を留めるのは、レジスタンスの英雄ムーランを死に至らしめた事件の容疑者として、二度裁判にかけられたことによる。その容疑とは何か。

一九四三年五月二七日、ムーランは国内レジスタンス組織を統一に導いたが、六月二一日にリヨン近郊カリユールの会合で七名のレジスタンス指導者とともに逮捕され、拷問死を遂げた。ムーランが会合を開いたのは、

六月九日に逮捕されたドレストランの後任を決める必要があったからだ。ムーランを逮捕したのはバルビーである。それ以来、ムーランの死について議論がなされている。アルデイの裏切なのか、それともコンバとムーランとの主導権争いの結果なのかという議論である。後者の議論の一例は、コンバがドレストランの後任を自派から出そうとして、当初の会合メンバーではないアルデイを、彼の逮捕を知りつつカリユールに送ったことだ。裏切論は、カリユールで逃亡できたのがアルデイただ一人であったことに基づく。他の指導者は手錠をはめられていたが、彼のみ縄で縛られていた。疑惑を決定づけたのはフローラ文書の発見だ。フローラ文書とは、マルセイユ地区ゲシュタポ隊長が四三年七月に記した報告書のことである。そこにはアルデイの裏切が記されていた。アルデイは六月七日にバリ行きの列車内で逮捕され、バルビーに引き渡された後、二重スパイとなつてリヨンにおける会合でムーランの逮捕を可能ならしめた、と。アルデイの逮捕後、リヨンのゲシュタポ本部でリディはアルデイにドイツとの協力を勧めていた。

かくして、アルデイは通敵行為と国家反逆罪で一九四七年に訴追されたが、彼はフローラ文書は共産党による捏造であると抗弁し、コンバの指導者がアルデイの無罪を主張したこともあり、証拠不十分として放免された。しかし釈放されて半月も経たない内に、アルデイの供述に偽りありとの証言が出てきた。彼は逮捕を否認していたが、途中のシャロン駅で逮捕されて降ろされたという車掌の目撃証言と、シャロン駅からパリまで空席の検印が押された寝台券が出てきたのである。この寝台券を予約したのはリディであり、予約情報はシュテングリットに伝えられていた。こうしてアルデイは再び逮捕

され、五〇年に二回目の裁判が開かれた。軍事法廷でも七名の判事四名しか有罪に賛成せず、五名の賛成という有罪条件を満たすことなく釈放された。奇妙にも、リディは裁判で証言を求められなかったのみならず、後に判明したように証人に嘘の証言をさせてアルデイの無罪に貢献していたが、それは疑惑が自分にも及ぶのを防ぐためであった。

さらに戦中の彼女は、フランスの極右組織カグルの元団員にしてコンバの指導者ベヌヴィルの指示で、元団員二人（カステラン、リシャル）とパリでたびたび会っていた。アルデイもパリで同様の関係を持っている。ヴィシー政府の情報部に勤めるリシャルは、ドイツ軍諜報部やゲシュタポのためにも働いていた。一九四四年五月、アルデイとリディがアルジェに行くのに必要な偽の身分証を用意したのもリシャルである。こうして、リディはリシャルとコンバとの仲介者となり、さまざまな情報が交換された。つまりコンバと秘密軍はスパイに浸透されていた。リディはアルデイを裏切へと導き、それがムーランの死に繋がった。その報酬は、ゲシュタポがユダヤ人から奪った宝石であった。

リディは反共と反ユダヤの信奉者ではあるが、ナチズムに染まっていたわけではない。道徳観のない彼女は「善悪の彼岸」の住人、強者の側で生きる人間であった。バルビーがリヨン撤退時に書類を焼却して証拠を隠滅したこともあり、戦後、リディは追及されることなく、数名の富豪との結婚を繰り返して、九四年に死去した。

参考文献

- Daniel Cordier, Jean Moulin, la République des catacombes, Paris, 1999.
- Pierre Péan, La diabolique de Caluire, Paris, 1999.
- Pierre Péan, Vies et morts de Jean Moulin, Paris, 1998.

# 近代日本音楽史を 彩る女性たち

3  
明治楽壇の開祖  
幸田延  
(その1)

佐野 仁美  
本学発達教育学部  
児童教育学科准教授



幸田延 (出典: 「私の半生」『音楽世界』第3巻第6号、1931年、40頁)

文豪幸田露伴の妹、延(二八七〇—一九四六)は、代々徳川家に仕えた家に生まれた。妹幸もヴァイオリニストである。延は三歳の時から母猷(ゆき)に長唄の教えを受け、七歳で師匠についた。母は延に、習った事はその日のうちに弾きこなせるまでやめさせず、前に習った曲を必ず七つ弾き、一曲の中で三度穢らしい音を出したら、最初から弾き直させるといふ厳しい稽古を課した。後年、延は「その幼時の習慣は、ピアノを習ふとき、どんなに大きく役立ったことか」と語っている。

邦楽の雰囲気の中で育てられた延に、大きな転機が訪れる。通っていた

スルも受け、フックスに和声学を学び、ブライベートで対位法と作曲法も習うなど、猛勉強のかたわら、ハンス・リヒター指揮の『運命』や、ワグナーの『ローエングリン』をはじめ本場で多くの音楽を聴いた。

延は途中一年間休学してミラノに滞在するものの、一八九五年に優秀な成績で音楽院を卒業し、帰国後母校の教授となる。人々は長期にわたり留学した延をどのように迎えたのだろうか。洋行がめずらしかったこの時代、最先端の西洋文化の象徴として洋楽に目を向けていたのは、文学者であった。ドイツで音楽を聴いた森鷗外は延を訪れ、音楽談義を交わしたことを一八九六年三月の『めざまし草』に掲載された「樂塵―西樂と幸田氏と―」の中で紹介している。ちなみに、この雑誌には露伴も

東京女子師範学校(現在のお茶の水女子大学)附属小学校にアメリカ人教師メーソンが唱歌を教えに来て、そこで初めてピアノを聴いた延は、その音の素晴らしさに驚嘆した。そして、メーソンに音感の良さを見出され、毎週土曜午後には音楽取調掛で助手の中村専からピアノの手ほどきを受けることとなった。まだ特別な場所を除いてピアノがない時代で、音楽取調掛で二、三度さらって見てもらい、家に帰ってからは三味線か箏を稽古していたという。

延は小学校を卒業後、音楽取調掛に入学し、最初の女子留学生でアメリカから帰国した永井繁子にピアノを習う。後に延は、そこでモルモットのようになり、ヴァイオリン、箏、オルガン、独唱など、何でもさせられたと回想している。洋楽の伝習が始まったばかりで、教える人自体が不足していた音楽取調掛では、いろいろな種目を学習して専門を深めるといふ段階であった。

一八八五(明治一八)年に最優秀の成績で第一回全科卒業生となった延は、引き続き助手としてピアノと唱歌を担当した。卒業演習会でウェーバーの『舞踏への勧誘』をピアノ独奏し、ヴァイオリンや箏も演奏したほか、鹿鳴館で開かれた演奏会でも活躍している。聴衆

加わっていた。

一八九六年四月の帰朝後初の公開演奏会で、延はメンデルスゾーン『ヴァイオリン協奏曲』第一楽章を独奏し、室内楽、独唱、伴奏、合奏の編曲まで担当した。渡欧経験のある祖父や父、最初の女子留学生であった叔母を持ち、初期の音楽批評の筆をとっていた上田敏は、同年五月の『帝國文学』に掲載された「同聲會演奏」で、延の演奏について、「肉聲は量ありて低く、『ギョロン』にはメンデルソンの難曲を撰びて『テクニク』の妙を盡せるは、初舞臺に適したる樂ならむ」と書いている。当時このような曲を弾ける人はほかになく、延は歌に伴奏にと、まさに八面六臂の活躍であった。

同年秋の演奏会について、敏と榊保三郎との連名で『読売新聞』十一月一・二二日号に発表された「同聲會演奏批評」では、延の独唱に関して「表情の一方便なる音聲の顫動等例の如く巧みなれども、當日は平素の美音に似ず聲波少しく滑らかならず、獨逸語も亦明晰を欲き、聲量も歸朝新來の當時に比して著るしく減じたる如き」と厳しい言葉も見られる。最後に敏は、日本の洋楽史を管弦、洋琴(ピアノ)が盛んであったソープレー時代、ヴァイオリン、

が馴染んでいたのは邦楽で、演奏者も長い曲を演奏するには至らなかつた創世期の音楽会では、邦楽を含む多くのプログラムが一緒に演奏されていた。ここでは邦楽から洋楽に向かった女性が活躍していたのである。

この時期の音楽取調掛では、海軍のお雇い外国人であったドイツ人エツケルトと、その後任にピアノ担当としてオランダ人ソープレットが雇い入れられた。一八八七年に東京音楽学校と改称して芸術家養成機関を目指すようになり、翌年には世界に通用するレヴェルの音楽家であるオーストリア人のディットリッヒがヴァイオリンや管弦楽担当として雇われ、ドイツ色が強まっていく。

ディットリッヒからヴァイオリンのレッスンを受けていた延は、一八八九年に文部省の命を受け、院長がメーソンと交友があつた関係でボストンのニューイングランド音楽院に留学する。彼女は専攻に定められたヴァイオリンのほか、ピアノ、和声学も学び、ニキシュ、サラサテらの演奏も聴いた。翌年にはウィーンへ渡り、一年間準備した後、ディットリッヒの出身校であるウィーン音楽院に入学した。専攻はヴァイオリンだったが、ピアノのレッ

唱歌合唱が隆盛していたディットリヒ時代、その長所を合併した幸田嬢並に同声会時代の三期に分けて通覧し、漸く西欧楽会の風をなそうとしていると喜ぶ。ここからは歴史的に辿ろうとする敏の姿勢がうかがわれるだろう。啓蒙家敏の眼には、延の帰朝によって西洋のような楽壇が日本にも形成されつつあると映つたのである(以下次号)。

主要参考文献:

- 秋山竜英編著『日本の洋楽百年史』(第一法規出版、一九六六年)
- 幸田延「外行記要」(同声会雑誌)第1号、一八九六年、23―27頁
- 幸田延「私の半生」(『音楽世界』第3巻第6号、一九三一年、33―42頁)
- 幸田延・本誌記者「幸田延子先生にピアノ上達の秘訣を聴く」(『主婦の友』第18巻第11号、一九三四年、338―346頁)
- 東京藝術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第1巻(音楽之友社、一九八七年)
- 東京藝術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇』第1巻(音楽之友社、一九九〇年)
- 中村洪介「西洋の音、日本の耳―近代日本文学と西洋音楽―」(春秋社、一九八七年)
- 平高典子「幸田延のウィーン留学」(『玉川大学文学部紀要』第53号、二〇一三年)
- 平高典子「幸田延のボストン留学」(『玉川大学文学部紀要』第54号、二〇一四年)
- 『定本 上田敏全集』第7、10巻(教育出版センター、一九八五年)

# 物語の女性 3

## 『源氏物語』の藤典侍

野村 倫子 本学文学部日本語日本文学科教授

藤典侍は、紫の上をはじめとした家庭婦人の多い『源氏物語』の中では異色の存在である。父親は光源氏の乳母子の惟光で、活躍場面もほとんどない。五節の舞姫に選ばれた登場場面と、それに続く源氏の嗣子夕霧からの求愛が、最も注目され、巻名の「少女」もこの時の夕霧の贈歌に拠っている。

失脚して一時須磨・明石に退去していた光源氏が復権したのは三十三歳の時であった。兄の朱雀帝が退位し、その母弘徽殿太后と一族の右大臣方が権力から離れ、新帝として光源氏と中宮藤壺の間の皇子が即位したからである。新帝即位の十一月、五節の舞姫を差し出すことになった光源氏は、惟光の娘を奉ることになった。かつて光源氏の女性遍歴にも須磨明石の寓居にも付き従った惟光も、今は津の国の守となり、さらに都の左京を治める長官である「左京大夫」も兼任する出世ぶりである。

ぬ才能が要求され、惟光の娘もそれなりの気負いをもって任官を望んだものとみえる。

さて、夕霧は、舞姫の兄である殿上童に声をかけて恋を成就させようと目論む。仲立ちは拒絶されるが、何とか和歌を託すことに成功し、童は父の目を気にしながら姫君に渡す。夕霧の美しい筆跡に姉弟で見入っている折も折、惟光が手紙を取り上げて厳しく叱責したが、手紙の主が夕霧であると知ったとたんに上機嫌になり、出仕よりも夕霧との婚姻を進めようとする。光源氏の子息が中流貴族である惟光の娘を妻の一人とするのは、間違いなく「玉の輿」であった。惟光は、光源氏と明石の君の関係も間近で見えており、それだけに、夕霧からの求婚は最高の荣誉であった。

娘は夕霧の妻となったものの、女官として堅実な道を歩み始める。しかし、物語では女官としての活躍は描かれず、以後は「母」典侍のみが点描される。

彼女が次に登場するのは「若菜上」巻である。光源氏の妻の一人花散里が藤典侍の子どもを育て、中の一人は正

ある。娘は評判の美人であったが、惟光は気乗りがしない。しかし、自分よりも身分の高い按察使大納言が、側室が産んだとはいえ娘を差し出すと聞いて辞退できないところに追い込まれ、いっそのことこれを好機として宮仕えさせようと腹をくくったのである。ここに、一人の若者が登場する。

幼馴染である雲居雁への初恋を、その父内大臣に阻まれた夕霧である。夕霧は、光源氏の教育方針によって学問を修めるべく躰けられ、父が太政大臣であるにも関わらず六位から官僚人生を歩まされることになった。そのため雲居雁の異母兄弟たちが、父内大臣のおかげで上位にあるのに対して、ひたすら肩身の狭い思いをさせられていた。しかも、内大臣は娘の弘徽殿女御が立后できなかつた代わりに雲居雁の入内を考え、夕霧との結婚はまったくの論外視であった。傷心の夕霧は邸内を歩き

妻雲居雁の子どもたちと同じように童殿上させている。ところが「夕霧」巻に至って、雲居雁と藤典侍の二人を大切に扱ってきた夕霧が、突然の恋に我が身を見失う。夕霧は、親友の柏木(雲居雁の異母兄でもある)の死後遺された女二の宮を弔問するうちに恋情を押しさえきれなくなり、ついに強引に妻としました。怒った雲居雁は子供たちを残して実家に帰るといふ拳に出るが、その雲居雁を慰め和歌を贈ったのが藤典侍である。雲居雁から疎まれていたことを知っても、雲居雁の心の痛みをそのままにしておけないところに、懐の広さ、深さが見える。

このあとの本文には諸本でゆれがあるが、夕霧の子は雲居雁との間に四男三女、典侍とは二男三女と計十二人あり、典侍の産んだ三の君と二郎君が花散里に養われているとある。その後、さらに「宇治十帖」に入って再び典侍の子が話題の中心となる。先の女二の宮は夕霧と結婚したが子供には恵まれず、典侍の六の君を養女にしている。典侍の三番目の子で、すぐれた資質であるにも関わらず、母親が典侍ということでも軽く扱われるのを惜しんだ夕霧

回るうち、仮の部屋に待機する舞姫を覗き見てしまう。室内が暗くて定かには見えないが、雲居雁を思い出させる美しい女性の姿に思わず和歌を詠みかけた。しかし、気味悪く思った舞姫は返事をせず、化粧直しをするために女房達が集まり始めると、夕霧はそっとその場を立ち去った。

惟光は典侍の欠員状況を知って娘の就職斡旋を光源氏に頼むが、夕霧はその話を聞いて、また落ち込んでしまう。典侍は後宮十二司の一つ内侍司の次官である。内侍司は天皇に常侍し、天皇に奏請、また天皇の言葉を宣伝する他、宮中女官の管理統率にもあたった。長官の尚侍は二人、次官の典侍は四人、三等官の掌侍は四人、以下一〇〇人の女孺とあるが、尚侍は妃に近い存在になり、『源氏物語』では臘月夜や玉鬘のように大臣の娘たちが任じられている。その次官であるから、尚侍に劣ら

が宮の養女に迎えたのである。若い男性が近づきやすい雰囲気を演出し、六の君の本質を理解できる男性に娶わせようと夕霧は目論む。やがて「宿木」巻で、明石中宮の産んだ今上帝第三皇子匂宮の妃にと望み、女二の宮の住む六条院東北の町に匂宮を婿として迎える。匂宮の目を通して描かれる六の君は、宮の杞憂を払拭するほどの女性で、その心を捉えた。結婚翌日の後朝の文への返歌は「継母の宮」(「女二の宮」の手跡とあり、盛大に行われた結婚三日夜の儀式にも実母の藤典侍の影はない。

夕霧に求婚された時に、父の惟光が自身を明石入道になぞらえたが、惟光の孫は宮家の妃となった。花散里に育てられた三の君の動静は語られないが、典侍は花散里(女二の宮)と養子・養女に出しても恥ずかしくない教育を子供たちに施したと思える。長官である尚侍は権門の姫君である臘月夜・玉鬘と次々に代わったが、藤典侍は物語に登場した「少女」(夕霧十二歳)から、「宿木」(同五十一歳)まで四十年近く職務を継続しようとして、重きを置かれた存在と言える。

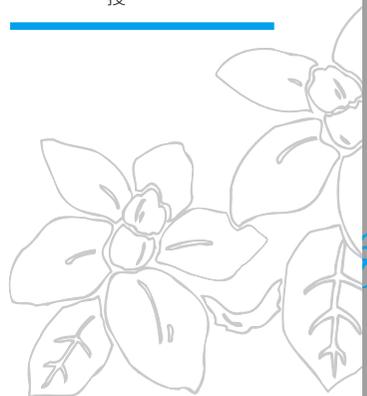


# 42

## ●連載●イギリス女性生活誌 一九世紀イギリスの レジエンド・ウーマンたち3 —近代看護のパイオニアとして彼女が残したもの—

松浦 京子

本学文学部歴史学科教授

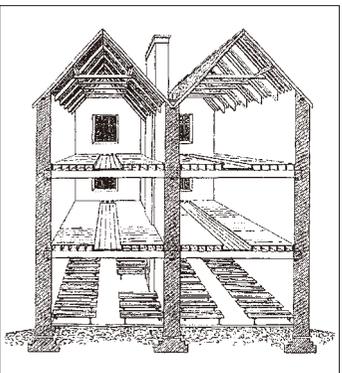


近代看護の聖女アグネス・E・ジョーンズ。リバプールの救貧院であるブラウンロウ・ヒル・ワークハウス付属施療院における看護改革に奮闘し三五歳という若さで発疹チフスに感染して亡くなった彼女に対して、F・ナイティンゲールは「彼女は誰よりも激しく働き、働きぬいた。イングランドにおけるもつとも価値ある生き方の一つを彼女は送ったと私は思う」という賛辞と深い哀悼の言葉を贈っている。ブラウンロウ・ヒル施療院での彼女の活動は三年あまりと短かったが、その残した実績により、その後の救貧院付属施療院での全国的なトレイインド・ナース(正規の専門訓練を受けた看護師)の雇用と看護教育推進という改革の途を開いたのであり、また、その献身のゆえの死は多くの人に衝撃と深い悲しみをもたらした。彼女は、ナイティンゲールの絢爛たる追悼の辞に相応しい存在と

して一つの伝説となったのである。

リバプールの著名な篤志家であり巡回訪問看護制度確立に大きな役割を果たしたW・ラスボーンが、もう一つの社会貢献として救貧院付属施療院の看護改革に目を向けナイティンゲール看護学校修了のトレイインド・ナースを改革責任者として招こうとしたとき、その困難な責務に対して困惑が広がるなか、唯一名乗りを上げたのがジョーンズであった。彼女は、救貧制度の下にある施療院、すなわち「混沌と悲惨」の蔓延する社会的最底辺において看護改革を遂行するという重責に対して、おそらく使命感にあふれ、確固たる決意のもとにブラウンロウ・ヒルに着任したのである。収容患者に対する看護レベル、衛生状況の向上、そして、看護教育、為さなければならぬことは山積みであった。

救貧院を管轄する救貧法委員会への



1840年に発表された救貧院宿泊棟完成予想図  
収容数を確保するため2,3階は雑魚寝スタイルであり、  
病棟にあたる1階にのみ木製ベッドが並んでいる。  
出典：P. Higginbotham, Workhouse Encyclopedia, Stroud, 2012.

年次レポートには、新たな試みを進めようとする彼女とそれを認めようとしていない救貧院長との厳しい衝突が、そして既存のスタッフとの軋轢が記録されている。そのうえ、看護スタッフを完璧に統率しようとしても、それすらなかなか難しいことであったという。なぜなら、ナイティンゲール看護学校から修了生や見習い生などを率いていたとは言え、皆経験が浅く、彼女の指示に十分に応えられるわけではなかったからである。また、改革の眼目である救貧院収容女性から選抜して教育・訓練を施してトレイインド・ナースを養成するという点に関しても、初年次に見習い生となった四〇名のうち修了まで到達したのはわずか一六名であり、他は解雇されるか自ら辞めるという惨状であった。

こうしたなか、彼女の毎日は「朝五時一五分に起床し、深夜一時まで働く」というものであったという。過労が蓄積される一方であったろう。それが発疹チフスの感染につながったであろうが、こうなったのも職務分掌をせず全てを自ら引き受けてしまう彼女に問題があったのだと言われるかもしれないが、当時、彼女の仕事を委譲できないような人材は果たしていたのだろうか。彼女とともに着任したトレイインド・ナースも居たが、うち三人はジョーンズ自身が解雇せざるをえなかったし、それ以外の二人はその後に勤めたミドルセックス病院で病棟責任看護師には不向きと判断されてしまうレベルであったのである。すなわち、看護改革がようやく緒に就いた当時にあつては看護に相応しい人材の確保は大きな課題であったわけで、ましてや救貧院付属施療院という厳しい環境のなかでジョーンズは孤軍奮闘せざるを得なかったのであろう。そして、上述した救貧院長やその他スタッフとの衝突、これも、当時においては、どの病院においても看護責任者となったトレイインド・ナースが直面することであった。すなわち、病院、施療院内における看護師の権限、立場を主張し強化していくことも、看護改革の推進には不可欠なことであった。ジョーンズは、この面でも看護改革の最前線にいたのである。こうした彼女の奮闘は救貧院付属施

療院に何を為しえたのであろうか。彼女と衝突した院長自身が当時のレポートに次のような評価を残している。いわく「病棟の状態や病人の看護ばかりでなく、とりわけ患者(すなわち救貧院収容者)自身の態度にも著しい改善が見られた。献身的に職務を果たす人格的に優れた女性集団がもつ影響力は人を人らしくさせるもので、明らかに成果を生んだのである」と。看護レベルの改善のみならず、道徳的改善に言及している点が、救貧院という困窮貧民の救済と人間的向上を目指す施設の長の言辭らしいと言えるが、一方で、ナイティンゲールが目指した専門職としての看護師という、専門的技術や教養知性を備え、かつ人格的に優れたトレイインド・ナースの理想を実践しようとしていたジョーンズにとってはこの上ない賛辞であったと言えるだろう。救貧院付属施療院における看護改革

という困難な重責に挑んだジョーンズの残したものは称賛に値するものであった。しかし、前号でふれたように、ナイティンゲールにとっては彼女の業績を褒めたたえ誇らしく思う一方で、ほろ苦い思いもあったと思われるのである。ジョーンズのあまりの献身ぶり、それゆえの過労死という事実、これは厳しい看護環境とそれに果敢に挑んだ彼女の看護師としての使命感、責任感だけがもたらしたものであつたらうか。ナイティンゲールは、かつてジョーンズが看護師を志望した際に、彼女の深い信仰心を知るがゆえに看護と宣教とを区別できないのではないかと懸念したことがあつた。それゆえ、彼女の篤い信仰心、深い福音主義的理念が彼女に無理を強いた、とナイティンゲールが思い至るのは不思議ではないだろう。そして、それを残念なことと思つたのではなからうか。ナイティンゲール自身は篤い信仰心を持ち「召命」を信じた女性である。しかし、信仰と看護活動の厳然たる区別を理想としていた。それこそが、専門職としての看護師の在り方であるのだから、と。ジョーンズの死に至るほどの献身は彼女を近代看護の聖女とした。しかし、それは看護の本来の在りようとはいかあるべきかを問いかけるものでもあつたと思われる。



# 日本の伝統技術を守る

## 女性の進出 1

村上裕道

本学文学部歴史遺産学専攻教授

はじめに

平成30（2018）年2月に「伝統建築工匠の技・木造建造物を受け継ぐための伝統技術」について、国はユネスコ無形文化遺産へ提案することを決定した。同伝統技術は、木・草・土などの自然素材を生かした建築空間の維持のため、高度に発達した木工・屋根葺・左官・装飾・畳等、建築遺産とともに古代から途絶えることなく伝統を受け継ぎながら、工夫を重ねて発展してきた伝統建築技術と定義して、**椽皮葺・柿葺技術を始め、14件を列挙している**。それぞれ文化財保護法に示す、建築文化財を維持継承するためには、ならない技術として保護対象にしている「選定保存技術」に認定されているものである。

特に、ユネスコへの提案理由として、「法隆寺をはじめとする世界文化遺産となった木造建造物や、日本の建築文化を支える無形文化遺産の保護・伝承

の事例として、世界の建築に関わる職人や専門家との技術の交流、対話が深められ、国際社会における無形文化遺産の保護と取り組みに大きく貢献するものである。」とその要旨を述べている。

文化遺産の保護のため、その伝統技術を法律で定め、人材の確保に努めている事例は、世界的にもめずらしい制度である。さらに、その制度が20世紀にアジアの木造建築文化圏へ影響を与えてもいる。日本におけるシステムから国際的なシステムへ発展しつつある状況である。

### 25年前の調査

選定保存技術の一つである「**椽皮・柿葺**」について、平成4（1992）年頃、椽皮・柿葺等の植物性屋根葺技術の保存継承について、故村上栄一氏（当時の選定保存技術の保持者）から保存技術の継承が危機的な状況である

各地の地方公共団体や文化財所有者自らが資材の確保のため、ヒノキの森を椽皮葺採取地として協力してくださっている。一方、保存会も人材育成のため、各会社の枠を超えて取り組んできた。さらに、椽皮葺の建物が多い京都では、東山に研修センターを建設し、人材育成の支援も行っている等、かなり改善が進んできたところである。

### 女性の進出

昨年、国宝教王護国寺大師堂の椽皮葺の屋根葺替工事の状況を見る機会を得た。京都府教育委員会文化財保護課の設計監理の下、京都市内の『選定保存技術の保存団体』に所属する会社が実施していた。軒先の『軒付』と呼ぶ部分を調整しているところで、北面の

『前室』と呼ぶところでは、**鉋で軒付面の仕上げ（写2）**を行っていた。そして、東面に回った時、思わず「あれっ」と声に出してしまった。初めて女性の屋根葺職人に出会った（写3）のである。彼女は熟練の職人の指導の下、『**蓑甲**』と呼ぶ、軒の**螻羽**の最も椽皮葺らしい柔らかい曲線を表現する部分をデザインしていた。それだけに難しいところで、本格的な職人としての技術をマスターしようとしていることがわかる。伝統的産業の世界に女性が進出してきたことを喜ぶとともに、伝統産業における女性職員の状況に興味を持った。

早速、京都府文化財保護課に聞くと、女性の椽皮職人のことは知らなかったが、同課の「建造物修理」を担当する

専門職員19人の内、5人が女性であるとのことであった。また、同じく、同保存技術の保存団体である、（公財）文化財建造物保存技術協会に問い合わせると、約20%が女性職員との回答を得た。すでに、重要文化財を設計監理できる「主任技術者」になっている20年職員も2名おり、かなり本格的に参画していることがわかった。

間もなく、日本発祥の「選定保存技術」のシステムがユネスコ無形文化遺産に認証されることになる。すでに周知となっているように、人材難の状況のなか、このシステムがどのように発祥地で継承されていくのか、それを女性の進出が決める可能性がある。今後、その状況と課題について、調べていきたい。



(写1) 椽皮葺の葺替った国宝教王護国寺大師堂



(写2) 軒付仕上の作業風景 同大師堂



(写3) 女性の椽皮葺職人 同大師堂

# 女性歴史文化研究所 第28回シンポジウム報告

## 近代ヨーロッパにおける女性の社会進出

### —イギリスとフランスの事例から—

●日 時：2019年7月6日(土) 13:00～16:30

●会 場：キャンパスプラザ京都

●講 師：松田 祐子 (大学非常勤講師)

「近代ヨーロッパにおける女性の社会進出 —フランスの事例 教職を中心に」

松浦 京子 (本学文学部歴史学科教授)

「アマチュア・ヴォランティアからプロフェッションへ

—前世紀転換期イギリスの女性福祉活動から社会進出を考える」

●司会・コーディネーター：渡邊 和行 (本学文学部歴史学科教授)



や視学官の評価、住民の目を気にする生活を送らねばならなかった。加えて、「無愛想」、「ぎすぎすしている」、「うぬぼれている」、「女ではない」といった女性教師に対する伝統的な偏見が依然として根強く残っていた。

そうした多くの障害がありながらも、女性教師は待遇の改善を求め、そのうち男性教師の人数を上まわり、「幼稚園・小学校の教師には女

今年度のシンポジウムは、一九世紀末～二〇世紀初頭の英仏において、女性がいかにして社会に進出していったのかについて、松田氏、松浦氏が講演を行い、パネルディスカッションでは渡邊氏を加え、さらに深く掘り下げるものとなった。

一九〇〇年前後のヨーロッパは、工業社会に向かって政治・経済・産業といった社会構造に大きな変化が起こっていた。その中で女性は、離婚や財産などに関する民事的諸権利を獲得し、徐々に中・高等教育も受けられるようになり、それまで就労できなかった分野への就業が可能となった。また、フェミニズム運動が展開され、中流階級以上の女性たちが働くことに対しての偏見がそれ以前より弱くなり、自立・自活のために就労する女性が増加した時代でもあった。

#### \*近代ヨーロッパにおける女性の社会進出

松田氏は、女性の社会進出とは「男性と平等な権利を持つて働くようになったこと」であるとし、フランスの女性教師に焦点をあて考察した。女性教師は、ブルジョワ階層の

性がふさわしい」といわれるまでに地位を向上させた。松田氏は最後に、女性教師とは、困難にもめげず教職をまっとうし、充実した人生を送ったパイオニアであったと結んだ。

#### \*アマチュア・ヴォランティアからプロフェッションへ

続いて松浦氏は、女性の社会進出を「女性の存在が認められなかった領域へ進出していくこと」であるとし、ヘルス・ヴィジター（訪問保健師）に注目し論じた。

ヘルス・ヴィジターは、中流階級の女性たちが労働者家庭を訪問し、衛生知識や家庭管理術を教えるヴォランティア活動を起源とする。当時ニューウーマンと呼ばれる、男性と同じように働く中流階級の女性たちが登場し、その女性たちにふさわしい専門職の確立が望まれていた時期であった。そこに産業革命により悪化した衛生環境や、高い乳幼児死亡率の改善が急務となった公衆保健衛生行政と結びつき、ヘルス・ヴィジターとして職業化し、女性の公務職化への可能性が生まれた。やがて保健衛生の領域で、女性の有用性が広く認められ、資格試験や養成課程



女性にふさわしいとされる職の一つであった。しかし、その職に就くためには免状や資格などを取得した後には任用されるのを待つか、厳しい条件付きの師範学校を卒業する必要がある。そして苦勞して教師になれたとしても、労働者階級出身者が多い男性教師と違い、プチ・ブルジョワ層出身者が多い女性教師は赴任地になじみにくかった。また、賃金は男性よりも安く、独身の若い女ということでもなめられやすく、任命権者

が整備され、女性衛生査察官としてのヘルス・ヴィジターも登場し、プロフェッションナル化が進んでいった。完全な専門職化は第二次世界大戦後まで待たなければならぬが、単なる衛生知識の伝達者ではなく、保健福祉の面で非常に大きな役割を果たしたのがヘルス・ヴィジターであると、松浦氏は結んだ。

#### \*パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、フランスにおける保健師、イギリスにおける女性教師はそれぞれどうであったのか話しあわれた後、会場から寄せられた質問に回答する者たちで進められた。「なぜ女性には諸権利がなく、偏見があったのか」や「仕事と結婚の両立はできたのか」、「宗教は女性の社会進出に影響を及ぼしたのか」といった質問に対し、活発な意見交換が行われた。最後に渡邊氏が、「講演を通じて英仏に共通の課題があったことが浮き彫りになった。それをどう乗り越えていったのか、何が問題として残ったのかを今後も追求していきたい」と締めくくりに、シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じた。



## 『クロノス』25年

増淵 徹 女性歴史文化研究所長／本学文学部歴史学教授

京都橋大学の前身・京都橋女子大学に女性歴史文化研究所が開設されたのは平成四（一九九二）年で、広報誌『CHRONOS「時の鳥」』は三年目の平成六（一九九四）年一〇月に創刊された。「クロノス」はギリシア神話にみえる時を司る神（ラテン語表記で Chronus）で、造形的には翼をもつ姿で描かれることが多い。歴史学との関連でいうと、「年代記」の英語表記 Chronology がこれに由来するのはよく知られた話である。

一方、日本語では「時鳥」と書くときとホトトギスのことと、田植えの時を告げる頃に鳴く鳥であることに由来するという説もあるようだ。異称も多く、文学の世界では「郭公」とか「不如帰」と表記されることも多い。ホトトギスへの関心を繰り返し表出したのは清少納言で、彼女はその魅力を以下のように記している（新日本古典文学大系『枕草子』第三四段）

四月のつごもり五月のついたちの比よほひ、橘の葉のこく青きに、花のいとしろうさきたるが、雨うちふりたるつとめてなどは、よになう心あるさまにかし。花のなかより、こがねの玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝霧にぬれたる、あさほらけの

幻）は、さしずめその代表ではないかと思う。

西欧古典古代文化で生まれた神クロノスと、東アジア文化で認識されたホトトギスは、「時」を通して呼応し、後者はまた橘を介して人間の感興と交流する。二七年前の京都橋大学、英語英文学科・国文学科・歴史学科の三学科からなる文学部のみの小規模単科大学が設立した研究所に集った発足のメンバーを回顧しながら、『クロノス』「時の鳥」という誌名に込められた意思をあらためて考えたい。

その『クロノス』は、創刊から二五年を経、号数も本号で42号を数える。31〜39号は年一回発行とし体裁も変更したが、40号からは広報誌の原点に戻って元の体裁に戻し、発行も年2回として、研究所の活動や関心の方向をより身近に発信するように試みている。

『クロノス』創刊号は、①各界の方々の考えを聞く「所長対談」、②学会の話題を提供する「学界atランダム」、③近代イギリスの女性の活動を紹介・解説した「イギリス女性生活誌」、④京都における各時代の女性たち

桜におとらず。郭公ほととぎすのよすがとさへ思へばにや、猶なほさら

（四月末から五月初めのころ、橘の青みを増した葉の中に真っ白な花が咲いているのを、雨の降る早朝に見たりすると、他にはない風情を感じるものだ。花の中の実が黄金の玉のように鮮やかに見えるところなどは、朝露にぬれた桜の美しさにも劣らない。ホトトギスが身を寄せる木と思うからであろうか、あらためて言う必要がないほど素敵だ）

清少納言は、旧暦の五月初旬頃に花期を迎える橘の風情を、時鳥と相まって語る。彼女が記すように、橘の開花期とホトトギスが鳴く季節は同じなので、この両者の関係にちなむ描写や表現は、物語・随筆・和歌などの文学作品のさまざまな局面を通して数多くつくられてきた。さらには、季節（時間）との相関が強く理解されるだけに、現世に生きる人間の過ぎ去った日々への認識や感興を呼びおこす素材としても機能するようになった。亡き紫の上を忘れられない源氏のもとを夕霧が訪れ、月光に浮ぶ橘の花を眺めながら思い出話をしているとき、不意に聞こえたホトトギスの鳴き声に触発されて、二人が歌を詠む場面（『源氏物語』

の活動をとらえた「京（みやこ）の女たち」、⑤海外の女性関連事情を紹介する「WORLD REPORT」、⑥「女性史・女性学授業紹介」、⑦書評・新刊紹介の「BOOK REVIEW」の7コーナーから構成された。

このうち「イギリス女性生活誌」は現在に続く唯一の連載で、一国には限られるが女性の活動の多様な局面を取り上げ、その歴史的意義を紹介してきた点で、当研究所にふさわしい連載であると自負している。「京の女たち」は30号で終了したが、その間に『京都の女性史』（思文閣出版、二〇〇二年）に代表される共同研究の成果や、個人の論文・著書を発表して、その成果を世に問うてきた。これらとは別に「男と女 美意識の変遷」（8〜28号）、「性と生殖をめぐる諸問題」（13〜24号）、「食の歴史と女性」（25〜39号）など、学部・学科間の枠を越えた各種の共同研究プロジェクトと連動しての連載も構成してきた。『医療の社会史』（思文閣出版、二〇一三年）も、看護学部設立後の共同研究「看護・医療と歴史社会」（29〜33号）の成果と連動している。

研究所の広報誌という性格からいえば、本学関係者による研究から見えてきたものを適宜紹介していくことが、その期待と評価に関わると言うべきであろう。研究所創設期の教職員はほとんど現場を去り、その後の第二・第三世代に活動の中心が移ってきている。二五年を経、あらためて当研究所の足元を見据える必要もあろう。その意味も込めて、女性史・女性文化という共通の土台の上に立ちながらも、多様な研究を進めるために、各学科教員による連載を再開して誌面の充実に努力したいと考えるところである。



京都橋大学女性歴史文化研究所は、女性史を中心に据えた西日本で初めての研究機関として1992年に開設され、いくつもの研究を展開し、評価を得てきました。

本研究所では、女性の置かれている現状や、それが形成されてきた歴史的・文化的環境などについて分析・研究し、現代社会における女性の地位を高めていくことを大きな目標にしています。同時に「女性」という視点から歴史を見つめ直すことで、歴史の空白部分を埋め、歴史学全体に深みと広がりをもたせることも大きな使命としています。

現在活動している第13プロジェクト「社会における女性の活動—京都とその周辺を舞台にして」は、第6プロジェクト「京都の歴史と女性」（1998～2002年度）の研究成果を発展させ、広い意味で京都に関係する女性たちを重要な対象として研究を展開することとしています。また、かつてない変化の時期にある現代女性の現状を考えるために、それぞれの時代・地域に生きた女性の具体的な姿を解明し、その個性や意義を議論できる研究事例を積み上げることを目指しています。

## ●その他の活動内容●

### ●シンポジウム開催（毎年度1回）

2019年度「近代ヨーロッパにおける女性の社会進出—イギリスとフランスの事例から—」（2019年7月6日開催）  
2018年度「発信する皇女たち—斎王を中心に—」（2018年11月25日開催） …など

### ●女性歴史文化研究所紀要（毎年度3月発行）

### ●広報誌『CHRONOS（クロノス）[時の鳥]』（毎年度2回発行）

### ●共同研究者による研究会・講演会開催

### ●主な出版物

『身体はだれのものか —比較史でみる装いとケア』（昭和堂、2018年）

『医療の社会史—生・老・病・死』（思文閣出版、2013年）

『表象のトランス・ジェンダー—越境する性』（新典社、2013年）

『京都の女性史』（思文閣出版、2002年） …など



## LIME 通信

今や情報の発信・収集に欠かせなくなったSNSですが、投稿された一言や、一枚の写真が世の中を動かすことがあります。

2019年1月、日本では「#KuToo」運動が話題となりました。「#KuToo」は、性的被害に対して「私も」と声を上げようと呼びかけた「#MeToo」運動になぞらえ、「靴」と「苦痛」を掛けたものです。この運動は、「私はいつか女性が仕事でヒールやパンプスを履かなきゃいけないという風習をなくしたい」と思っているの。（中略）なんで足怪我しながら仕事しなきゃいけないんだろう、男の人はべたんこぐつなのに。」という投稿がきっかけでした。女性にのみハイヒールやパンプスと

いったヒールのある靴の着用が強制されていることに疑問を呈したこの投稿に人々は反応し、多くの意見が飛び交い、改善を望む約18,800人分の署名が厚生労働省に提出されました。

この運動が始まって以降、店舗スタッフにスニーカーの着用を認める大手携帯電話会社、社員と就活生にスニーカーの着用を推奨する「#スニ活」キャンペーンを実施する会社、制服にスニーカーを採用する航空会社などが現われ、今も多くのメディアがこの話題を取り上げており、その影響の大きさを知ることができます。

性別によって強制されるものが多く残る現状は、今後どう変わっていくのでしょうか。

CHRONOS(クロノス) vol.42

発行日：2019年10月

発行：京都橋大学 女性歴史文化研究所  
〒607-8175 京都市山科区大宅山田町 34  
Tel.075-574-4186 Fax.075-574-4149  
E-mail：iwhc@tachibana-u.ac.jp

